

第3回 松本市中心市街地再設計検討会議

令和6年11月29日

目次

I 中核エリアの将来の見取り図（案）について

■ 取組経過

区 分	内 容
第 1 回検討会議(7/29)	・ 委員間で中核エリアの課題を共有し、現在の取組みから見える今後の方向性について議論 ・ 第 2 回検討会議に向けて検討テーマを共有
意見交換①(8/22)	・ 松本都市デザイン学習会と意見交換 [出席者] 山本座長代理、園田アドバイザー、事務局、団体の代表者 6 名
意見交換②(8/22)	・ 松本商工会議所商業部会・まちづくり委員会と意見交換 [出席者] 山本座長代理、園田アドバイザー、事務局、団体の代表者 4 名
意見交換③(8/23)	・ まつもとユニバーサルデザイン研究会と意見交換 [出席者] 山本座長代理、園田アドバイザー、事務局、団体の代表者 6 名
意見交換④(9/27)	・ 信州大学の学生と意見交換 ・ 「松本の地域課題」を研究するゼミの学生（19 人）と、中心市街地の活性化等をテーマに意見交換
第 2 回検討会議(9/30)	・ 第 1 回検討会議及び各種団体との意見交換を踏まえ、各検討テーマについて議論 ・ 今後のワークショップの開催等について共有
意見交換⑤(10/9)	・ 建築士事務所協会松筑支部及び建築士会松筑支部と意見交換 [出席者] 事務局、各団体の代表者 10 名
第 1 回ワークショップ(10/14)	・ 高校生、大学生を対象に「松本のミライを考えるワークショップ」を開催 [参加者] 高校生 15 名、大学生 17 名 計 32 名
市公式LINEを通じた意見募集 (8/9～10/31)	・ 中心市街地の再設計・再活性に向けた意見及びアイデアを募集 ※集計結果は資料 1 のとおり
第 2 回ワークショップ(11/16)	・ 公募した参加者による「松本のシンカを考えるワークショップ」を開催 ・ 松本市次期総合計画の策定及び中心市街地の再設計に向けて、「魅力的な中心市街地に」等をテーマに議論 [参加者] 29 名
意見交換⑥(11/22)	・ 松本「シンカ」推進会議で、これまでの取組経過を説明 ・ 中核エリアの将来の見取り図（案）について意見交換

■ 資料構成(案)

- これまでの検討会議、各種団体（5団体）との意見交換、信大生との意見交換、ワークショップ、市公式LINEでの意見募集の結果を踏まえた、指針の骨子案とする。
- 将来の見取り図は、コンセプト、指針、再設計のイメージ図の3要素で構成するものとする。

1

中核エリアの
再設計で目指すもの

2

中核エリア再設計の
3つのコンセプト

3

「パブリックスペース」と
「パブリックライフ」

4

“まち”に必要な
持続可能性の3要素

5

“松本らしさ”を構成する
要素

6

コンセプトに基づく
5つの指針

7

再設計のデザインシート

8

再設計のイメージ
指針①

9

再設計のイメージ
指針②

10

再設計のイメージ
指針③

11

再設計のイメージ
指針④

12

再設計のイメージ
指針①～④統合版

1 中核エリアの再設計で目指すもの

- 1967年（S42年）から行った松本駅周辺の土地区画整理事業から50年以上が経過し、社会や人々の意識、サービスに求めるレベルは大きく変化しています。
- この間、急速に増加した自動車交通や、それに伴う街路、駐車場などのインフラ整備によって、城下町特有の狭い町割りを受け継ぐ「中核エリア」は、都市における多くの活動を、限られたパブリックスペースの中で、衝突を避けて何とか機能させることで精一杯の状況に陥っています。
- 一方で、郊外型の商業施設は賑わいを見せており、市民がそれなりの生活の質を感じていることも確かです。車の利便性は、好きな時に好きな場所に、天候に左右されず、重い荷物を気にせずに出かけられることですが、車でのアクセスを基本とした郊外に広がる都市は、車がなければ暮らせないと形容される過度な車依存社会をもたらしています。
- しかし、このような社会は、将来に渡って持続可能なものではなく、歴史と文化を継承した「中核エリア」と日常生活が隔離したまちづくりは、結果的に私たち市民の生活の質を低下させていると言えます。
- そのような中、「中核エリア」が、次の50年で目指すべきものは、まちの土台になる安全・安心に加え、「パブリックライフ」の充実、つまり、“まち”を使って一人ひとりの生活や人生が豊かになること。
- 普段の生活は充実しているかもしれないが、“まち”に出るとそれ以上の楽しみがある。その楽しみ方は一人ひとり違う。この「パブリックライフ」の多様なシーンをデザインすることが、結果的に“まち”の賑わいとなる。
- そして、松本で暮らす人が豊かなパブリックライフを満喫し、次代を担う若い世代の人たちが集まり活躍しているシーンは、訪れる人にとっても魅力的なものであり、観光客や出張者などの訪れる人にとっての来街動機を増やすとともに、住みたいまちとして松本が選ばれることにも繋がります。
- 検討会議では、「中核エリア」を持続可能で、多様な「パブリックライフ」を提供する場所として再設計するため、将来の見取り図（コンセプト、指針、再設計のイメージ）について提言するものです。

3つのコンセプト

I 多様なパブリックライフを提供できる “まち”

II 経済・社会・環境が調和した持続可能な “まち”

III 水と緑に充ちた、文化・アートが溢れる “まち”

3 「パブリックスペース」と「パブリックライフ」

パブリックスペース

街路、小路、広場、公園、井戸・湧水、河川敷など、誰もが自由に過ごせる公共的な環境や空間

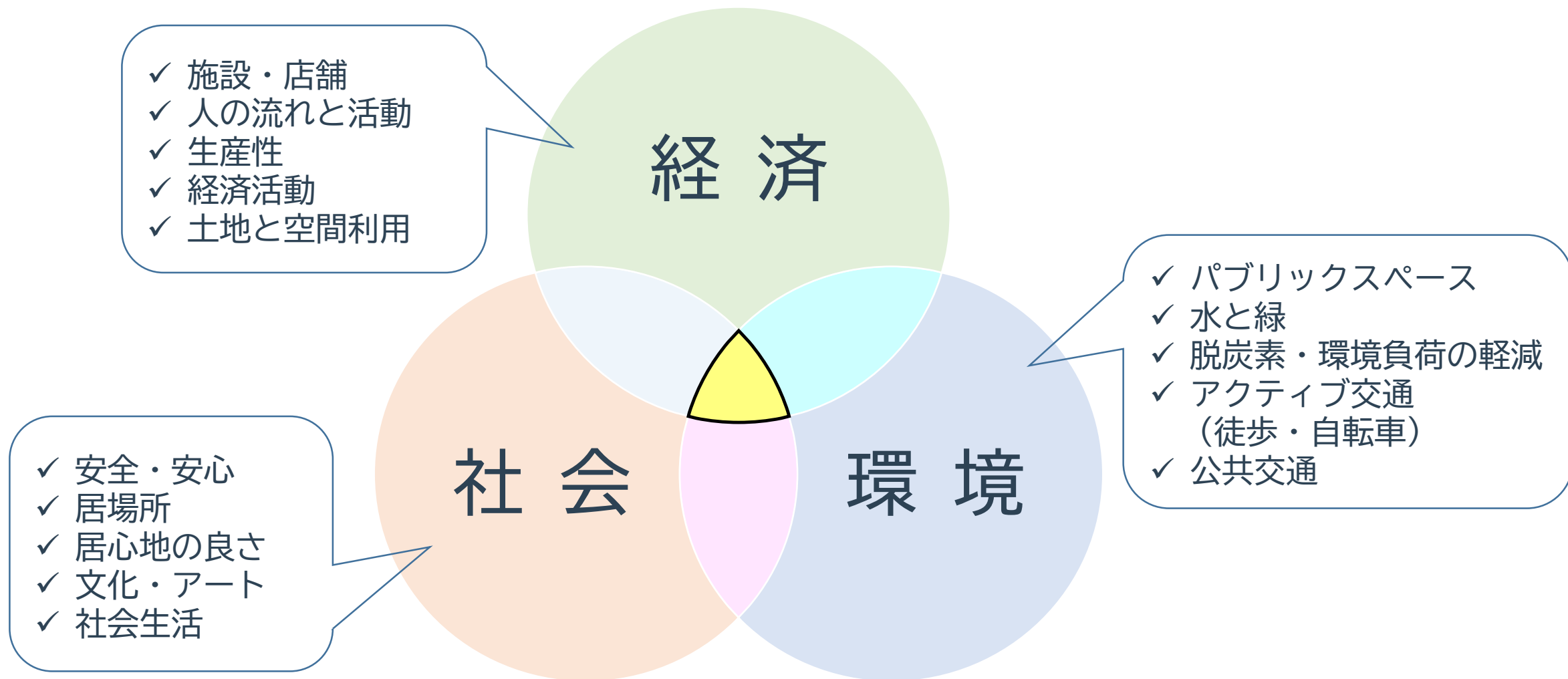
パブリックライフ

学校の行き帰りや放課後のお喋り、バルコニーでのコーヒータ임やご近所さんとの立ち話、広場でのアートイベントやカフェでの観光客との交流など、主にパブリックスペースを舞台に起き得るあらゆる活動のこと。私たちが外に出て目にすることができるすべての出来事



4 “まち”に必要な持続可能性の3要素

- 市民や企業がそれぞれの最適な行動を選択していった結果として“まち”が持続不可能になることがある
(例) すべての移動に車を使用、空き地の駐車場活用、ムクドリや落葉対策のための樹木の強剪定 など
- 本来の意味での持続可能な“まち”は、経済、社会、環境の3つの側面いずれもが重なり合う黄色の部分



5 “松本らしさ”を構成する要素

- 松本の“まちなか”は、城下町として培ってきた歴史や文化を大切にしながら、外からの影響も柔軟に受け入れ、暮らしの質を上手にアップデートしてきた経過がある。
- まちの中央に川が流れ、地下水が豊富なことから井戸や水路が多く、“まちなか”からアルプスを始めとした山並みを眺望できる環境は、他都市とは異なる水と緑への接し方、暮らし方を育んできた。
- 加えて、音楽、演劇、アートなど、“まちなか”で様々な文化に触れる場所や機会が多く、これらの多様な要素が、私たちが感じる“松本らしさ”を形作っている。



6 コンセプトに基づく5つの指針

① “城下町松本”の歴史と自然を活かしたウォーカブルな空間を創出

- 城下町はもともと人が歩くことを前提に設計された都市であることを再認識し、車の総量を抑制
- 歴史と文化、豊富な湧水と河川、山並みを望む眺望、公園と施設・店舗などが1つに繋がった、歩きたくなる空間を創出
- 駅前広場を都市軸の起点に、歩行者優先でまちを結び直すことで、新たに人の流れと活動を生み出し、まちなかの生産性を向上

② “まちを舞台”にした魅力的なパブリックスペースをデザイン

- まちに暮らす人、通う人、商売をする人、訪れる人、あらゆる人にとって居心地が良く、出かけたくなる環境整備
- 若者や学生、アーティストバンクに登録しているアーティストなどが、自由に活動、表現し、チャレンジができる環境整備
- 多様な主体が行う取組みを、豊かな日常の暮らしのシーンとすることで、住んでいる人の生活の質を向上

③ “安心・自由”に移動できるモビリティネットワークを実現

- 環境負荷を軽減し、モビリティの選択肢が増えるよう、徒歩や自転車のアクティブ交通と公共交通を長期的な視点で改良
- まちでの活動を支える社会基盤として、誰もが安心して「自由に移動できる」「動き回ることができる」環境を実現
- 松本駅と駅前広場を核に、交通の量と密度、スピードをリデザインすることで、まちなかの経済活動や社会生活を充実

④ “多様で高次な”都市施設を包摂する市街地を創造

- 多くの建物が更新時期を迎えている松本駅東エリアに、歴史や景観などの松本らしさを守りつつ、市民益に繋がる民間投資を誘導
- 住む、働く、学ぶ、集う、憩う、育てる、楽しむなど、多様で高次な都市施設を包摂する土地・空間利用をリデザイン
- 商都としての魅力をアップデートし続け、多彩なサービスを提供するとともに、まちに出る楽しみ、ハレの場としての機能を充実

⑤ “公民学連携”による推進体制を構築

- 再設計を推進するためのエンジンとなる公民学連携による推進体制を構築

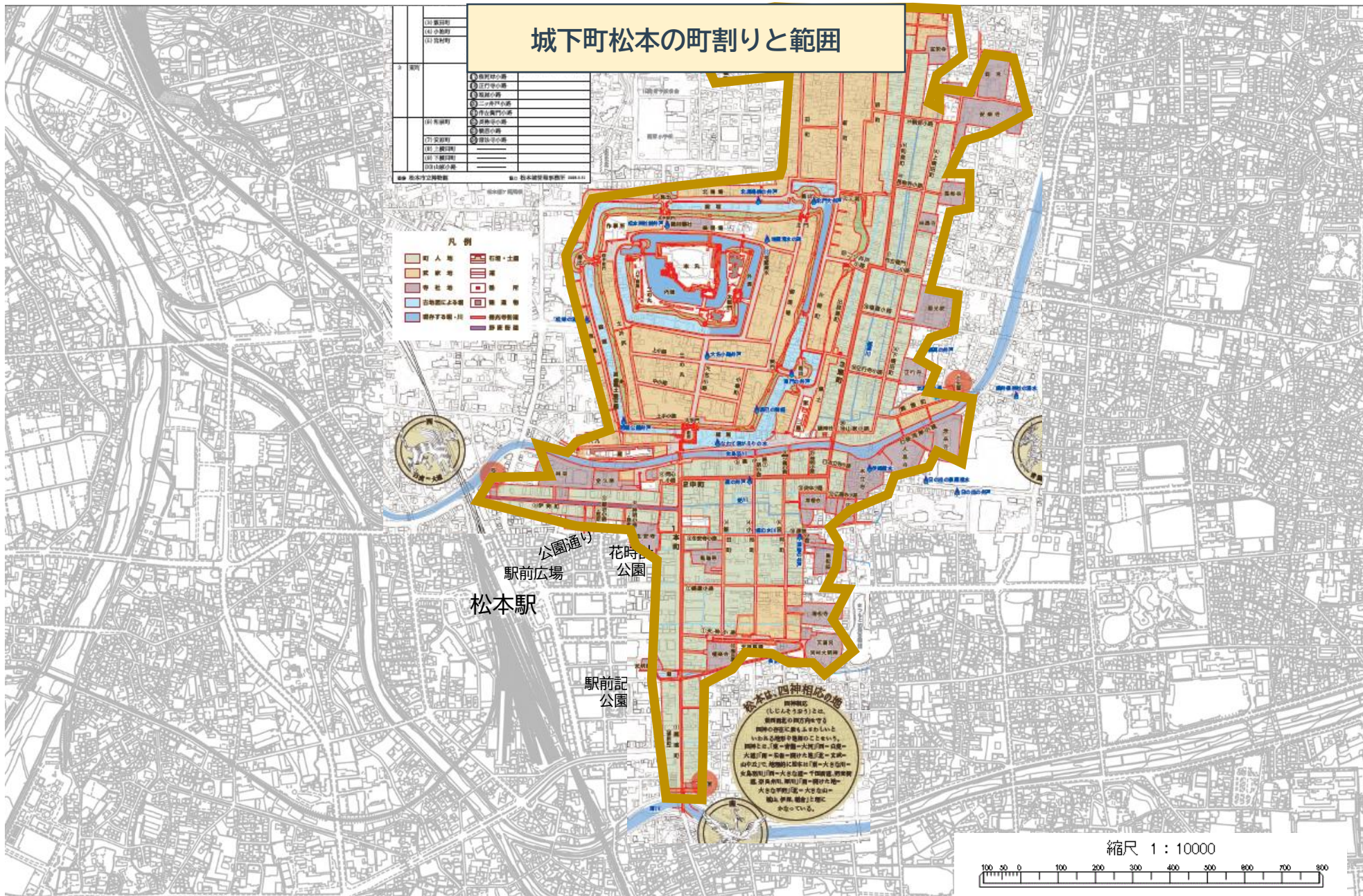
7 再設計のデザインシート

3つのコンセプト	5つの指針	再設計する内容・対象	再設計イメージ（具体的にやること）
Ⅰ 多様なパブリックライフを提供できる“まち” Ⅱ 経済・社会・環境が調和した持続可能な“まち” Ⅲ 水と緑に充ちた、文化・アートが溢れる“まち”	① “城下町松本”の歴史と自然を活かしたウォーカブルな空間を創出	- 城下町（歩くことを前提としたまち）であることを再認識 - 歴史と文化、湧水と河川、山並み、公園と施設・店舗などが1つに繋がった、歩きたくなる空間を創出 - 駅前広場を都市軸の起点に、歩行者優先でまちを結び直すことで、新たに人の流れと活動を生み出す	- 幹線道路とウォーカブルな空間とを明確化 - 幹線道路の道路改良と機能強化 - 松本駅から松本城までをウォーカブル区域に設定 - 恒常的な車両通行規制、一方通行化等による道路空間の再配分により歩行者空間を創出 - 井戸・湧水と河川、眺望景観、景観軸やシークエンス景観と一体となったウォーカブルな空間を創出 - 周辺敷地と一体となったウォーカブルな空間を創出 - ウォーカブル区域のグリーンインフラ整備
	② “まちを舞台”にした魅力的なパブリックスペースをデザイン	- 居心地がよく、出かけたくなる環境 - 若者や学生、アーティストなどが、自由に活動、表現し、チャレンジできる環境 - 多様な主体が行う取組みを、豊かな日常とするための仕組み	- 駅前広場、花時計公園、駅前記念公園、大手門櫓形跡広場、辰巳の御庭などのパブリックスペースを再設計 - 道路や河川等の活用を見据えた再設計 - 新庁舎整備に合わせて、現在の本庁舎敷地のあり方を検討 - まちなかアートprojectなどの取組みの拡充 - 多様な主体による、多様な活動を促進するための規制緩和や手続きの簡便化
	③ “安心・自由”に移動できるモビリティネットワークを実現	- モビリティの選択肢を増やす - アクティブ交通と公共交通を長期的な視点で改良 - 安心・自由に移動できる環境 - 松本駅・駅前広場を核に、交通の量、密度とスピードをリデザイン	- 松本駅周辺の交通処理により道路空間を再配分 - 駅前広場を、徒歩や自転車、公共交通を軸にシェアモビリティなど複数の移動の選択肢を提供するモビリティハブとして再設計 - 中核エリアへの車の流入を抑制するパークアンドライドやフリンジ駐車場を配置
	④ “多様で高次な”都市施設を包摂する市街地を創造	- 多くの建物が更新時期を迎えている松本駅東エリアに、歴史や景観などの松本らしさを守りつつ、市民益に繋がる民間投資を誘導 - 多様で高次な都市施設を包摂する土地・空間利用をリデザイン - まちに出る楽しみ、ハレの場としての機能を充実	- 松本駅東地区に、城下町の歴史や景観などの松本らしさを守りつつ、範囲、条件等を細かく設定する中で、市民益に繋がる民間投資を誘導 - 松本駅周辺に設置を望む声が多く、これまでの松本にはない新たな魅力を生み出す、多様で高次な都市施設を配置 - 松本駅東地区は、まちづくり協定が存在しないエリアのため、まちづくり協定やガイドライン等により、パブリックスペースを再設計
	⑤ “公民学連携”による推進体制を構築	再設計を推進するためのエンジンとなる公民学連携の推進体制を構築	公民学連携の推進体制の位置付けと役割、権限の検討

再設計のイメージ 指針①

“城下町松本”の歴史と自然を
活かしたウォーカブルな空間を創出

8 指針① “城下町松本” の歴史と自然を活かしたウォーカブルな空間を創出



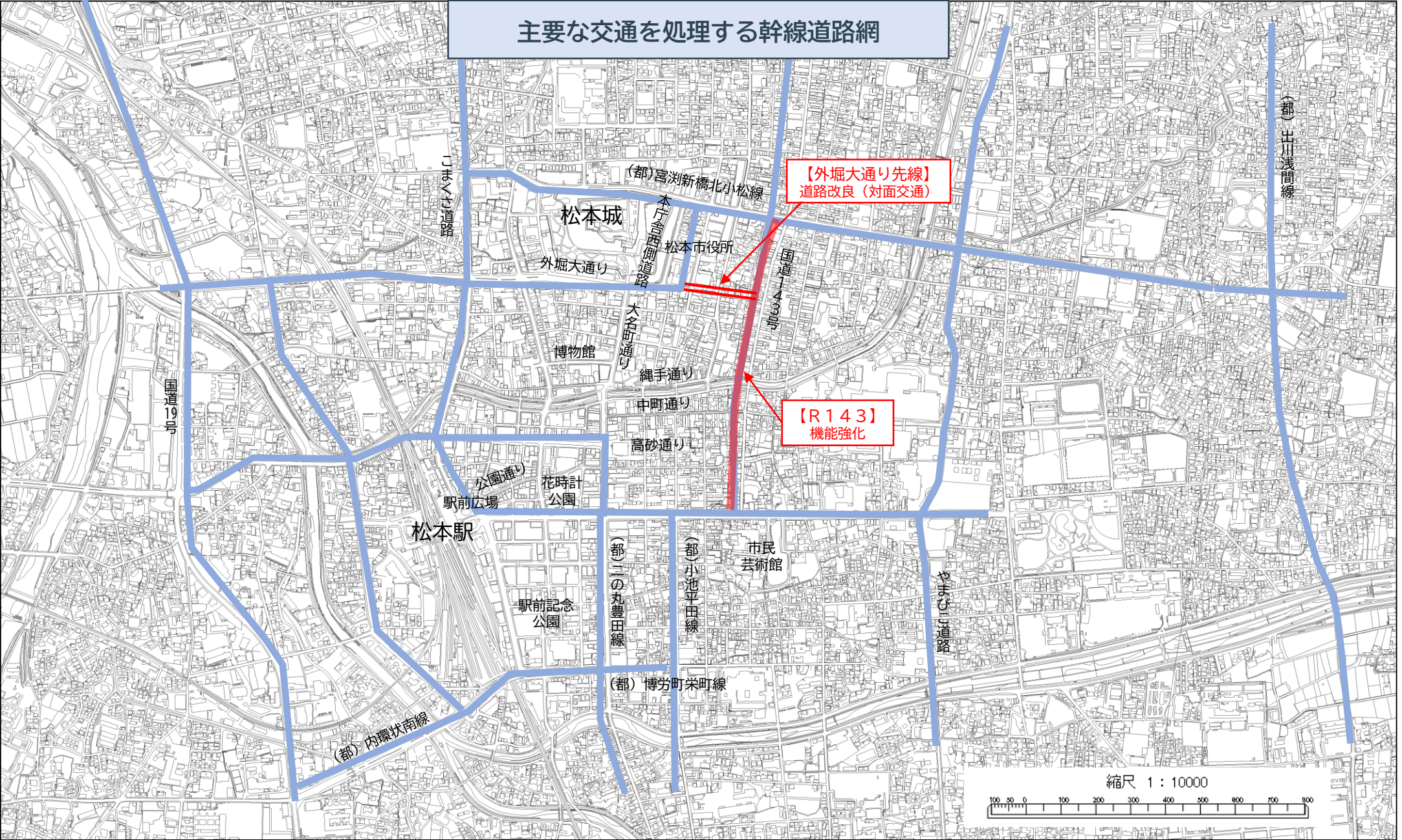
8 指針① “城下町松本” の歴史と自然を活かしたウォーカブルな空間を創出



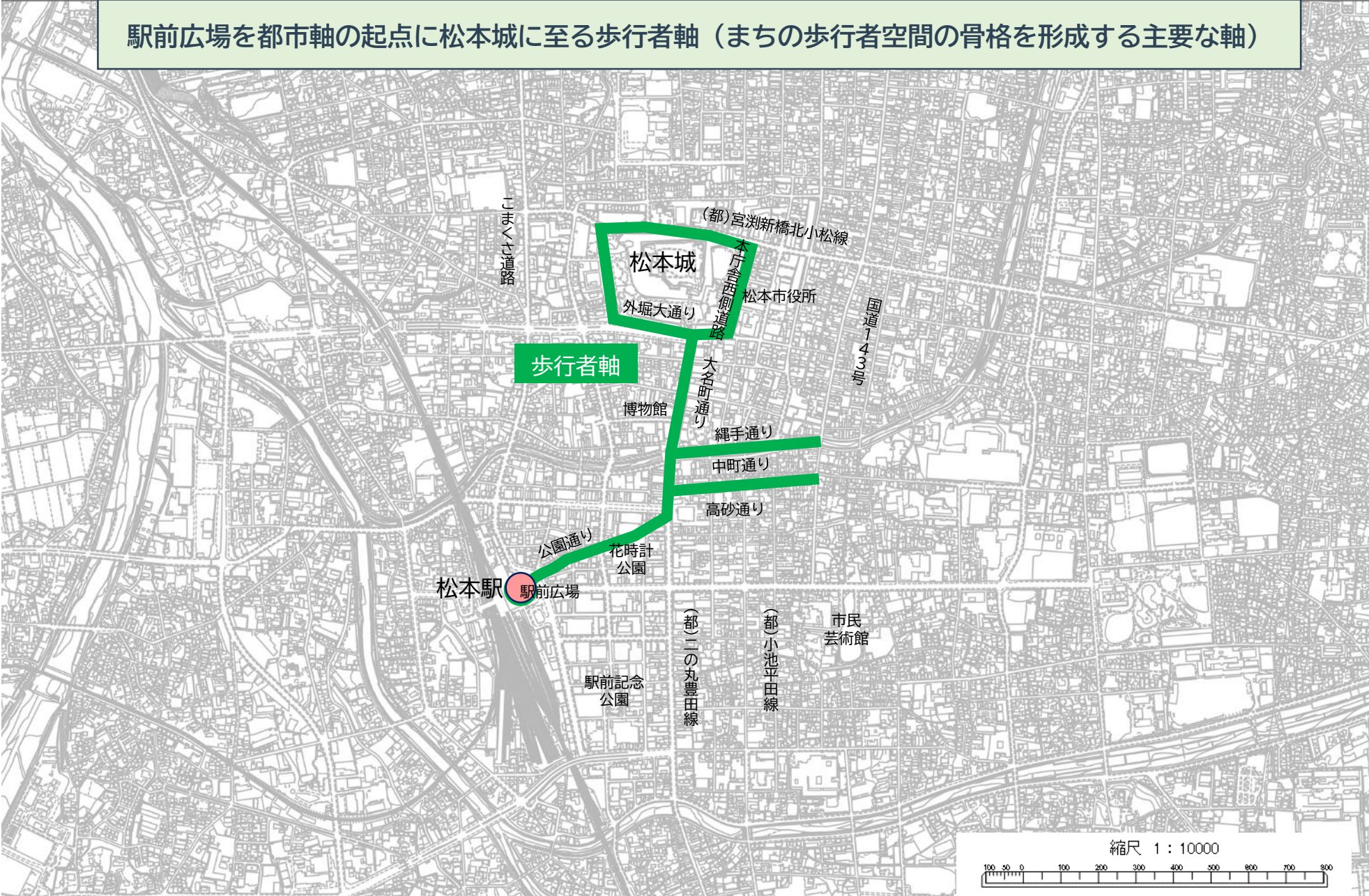
8 指針① “城下町松本” の歴史と自然を活かしたウォークラブルな空間を創出



8 指針① “城下町松本” の歴史と自然を活かしたウォーカブルな空間を創出

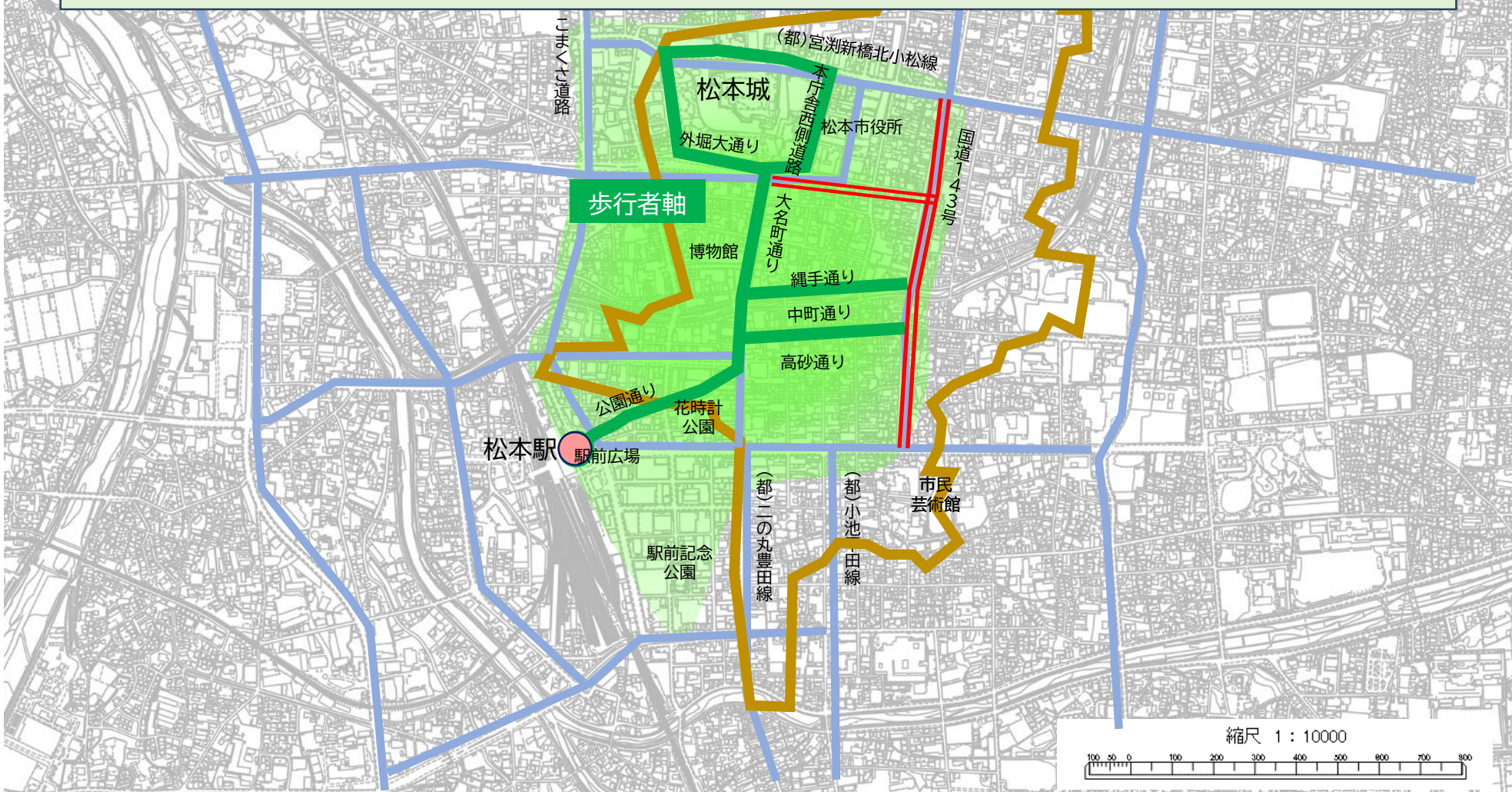


8 指針① “城下町松本” の歴史と自然を活かしたウォーカブルな空間を創出



8 指針① “城下町松本” の歴史と自然を活かしたウォーカブルな空間を創出

- 主要な交通を処理する幹線道路とウォーカブルな空間とするストリートを明確化、幹線道路の道路改良と機能強化
- 松本駅から松本城までをウォーカブル区域に設定し、通過交通の流入を抑制し、安全・安心で多様な歩行空間を整備
- 恒常的な車両通行規制、一方通行化等による道路空間の再配分により歩行者空間を創出
 - ⇒ 駅前広場から公園通りへ歩行者を誘導する工夫
 - ⇒ 公園通り、中町通りにおける恒常的な車両通行規制
- 井戸・湧水と河川、眺望景観や景観軸、シークエンス景観と一体となったウォーカブルな空間を創出
- 周辺敷地と一体となったウォーカブルな空間を創出 ⇒ 本庁舎敷地や花時計公園と一体となった道路空間の再編
- ウォーカブル区域のグリーンインフラ整備



再設計のイメージ 指針②

“まちを舞台” にした魅力的な
パブリックスペースをデザイン

9 指針② “まちを舞台” にした魅力的なパブリックスペースをデザイン

- 駅前広場、花時計公園、駅前記念公園、大手門櫛形広場、辰巳の御庭などのパブリックスペースを再設計（再整備）
- 道路や河川等の活用を見据えた再設計（再整備）
- 新庁舎整備に合わせて、現在の本庁舎敷地のあり方を検討
- まちなかアートproject、アーティストバンクの充実により、まちなかで文化芸術に触れる機会を拡充
- 多様な主体による、多様な活動を促進するための規制緩和や手続きの簡便化

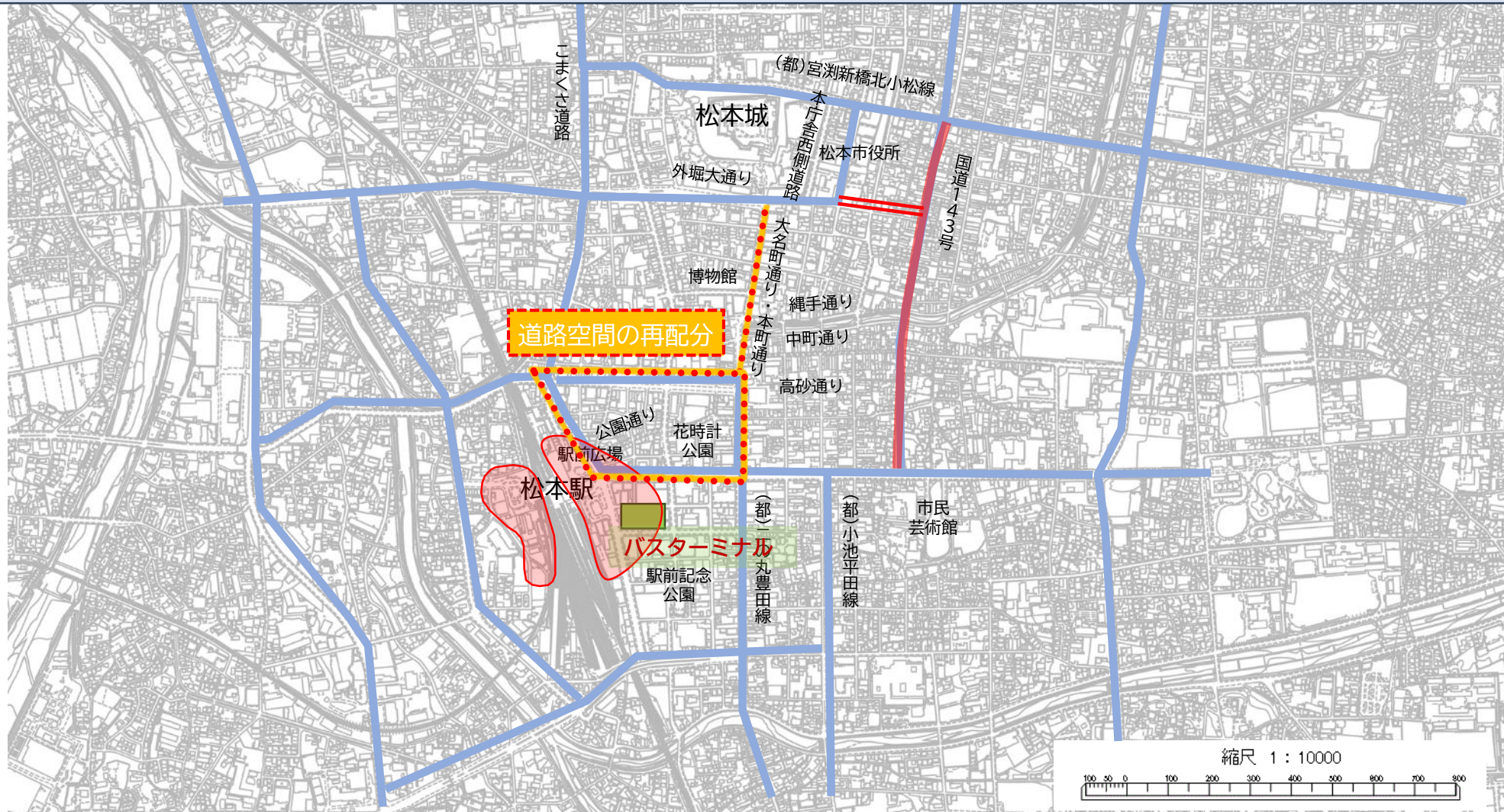


再設計のイメージ 指針③

“安心・自由” に移動できる
モビリティネットワークを実現

10 指針③ “安心・自由” に移動できるモビリティネットワークを実現

- 松本駅周辺において一方通行化などの交通処理の見直しにより道路空間を再配分し、歩行者の通行環境の向上と沿道建物との連動を促進
⇒交通処理の見直しにより生み出した空間をウォークブル、バス停、荷寄せ空間として活用
- 駅前広場を、徒歩や自転車、公共交通を主軸にシェアモビリティなど複数の移動の選択肢を提供するモビリティハブとして再設計（再整備）
- 車の流入を抑制するパークアンドライドやフリンジ駐車場を配置
⇒松本駅アルプス口等に自家用車専用の駐車場を配置

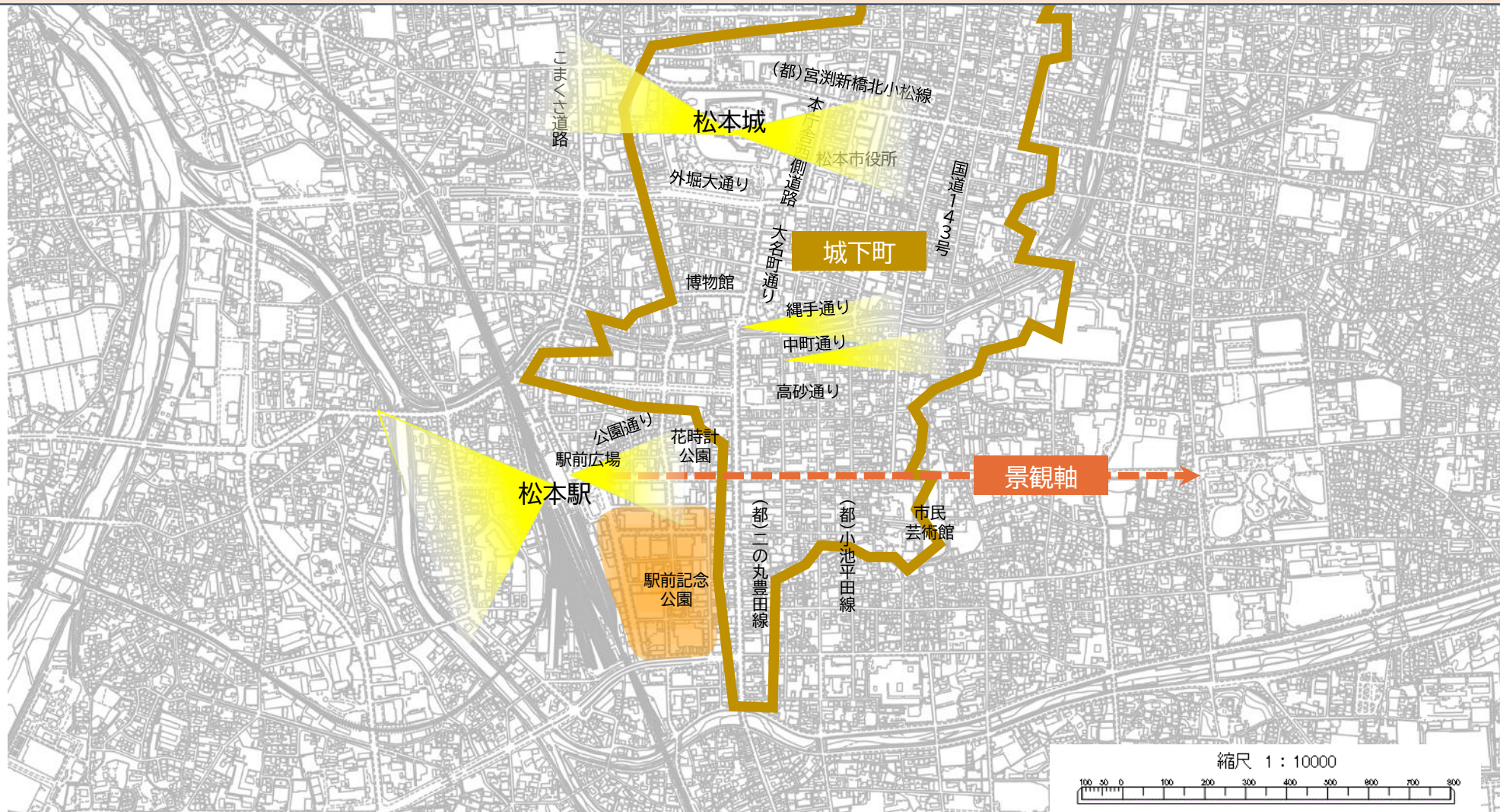


再設計のイメージ 指針④

“多様で高次な” 都市施設を包摂する
市街地を創造

1 1 指針④ “多様で高次な” 都市施設を包摂する市街地を創造

- 昭和の区画整理事業から50年以上が経過し、多くの建物が更新時期を迎えている松本駅東地区に、城下町の歴史や景観などの松本らしさを守りつつ、範囲、条件等を細かく設定する中で、市民益に繋がる民間投資を誘導
- 住む、働く、学ぶ、集う、憩う、育てる、楽しむなど、松本駅周辺に設置を望む声が多く、これまでの松本にはない新たな魅力を生み出す、多様で高次な都市施設を配置
- 松本駅東地区は、まちづくり協定が存在しないエリアのため、まちづくり協定やガイドライン等により、パブリックスペースを再設計



再設計のイメージ 指針①～④統合版

② “まちを舞台” にした魅力的なパブリックスペースをデザイン

- 駅前広場、花時計公園、駅前記念公園、大手門樹形跡広場、辰巳の御庭などのパブリック・スペースを再設計（再整備）
- 道路や河川等の活用を見据えた再設計（再整備）
- 新庁舎整備に合わせて、現在の本庁舎敷地のあり方を検討
- まちなかアートproject、アーティストバンクの充実により、まちなかで文化芸術に触れる機会を拡充
- 多様な主体による、多様な活動を促進するための規制緩和や手続きの簡便化

③ “安心・自由” に移動できるモビリティネットワークを実現

- 松本駅周辺において一方通行化などの交通処理の見直しにより道路空間を再配分し、歩行者の通行環境の向上と沿道建物の連動を促進
⇒ 交通処理の見直しにより生み出した空間をウォーカブル、バス停、荷寄せ空間として活用
- 駅前広場を、徒歩や自転車、公共交通を主軸にシェアモビリティなど複数の移動の選択肢を提供するモビリティハブとして再設計（再整備）
- 中核エリアへの車の流入を抑制するパークアンドライドやフリンジ駐車場を配置
⇒ 松本駅アルプス口等に自家用車専用の駐車場を配置

① “城下町松本” の歴史と自然を活かしたウォーカブルな空間を創出

- 主要な交通を処理する幹線道路とウォーカブルな空間とするストリートを明確化
- 幹線道路の道路改良と機能強化
- 松本駅から松本城までをウォーカブル区域に設定し、通過交通の流入を抑制し、安全・安心で多様な歩行空間を整備
- 恒常的な車両通行規制、一方通行化等による道路空間の再配分により歩行者空間を創出
⇒ 駅前広場から公園通りへ歩行者を誘導する工夫
⇒ 公園通り、中町通りにおける恒常的な車両通行規制
- 井戸・湧水と河川、眺望景観や景観軸、シークエンス景観と一体となったウォーカブル空間を創出
- 周辺敷地と一体となったウォーカブルな空間を創出
⇒ 本庁舎敷地や花時計公園と一体となった道路空間の再編
- ウォーカブル区域のグリーンインフラ整備

④ “多様で高次な” 都市施設を包摂する市街地を創造

- 昭和の区画整理事業から50年以上が経過し、多くの建物が更新時期を迎えている松本駅東地区に、城下町の歴史や景観などの松本らしさを守りつつ、範囲、条件等を細かく設定する中で、市民益に繋がる民間投資を誘導
- 住む、働く、学ぶ、集う、憩う、育てる、楽しむなど、松本駅周辺に設置を望む声が多く、これまでの松本にはない新たな魅力を生み出す、多様で高次の都市施設を配置
- 松本駅東地区は、まちづくり協定が存在しないエリアのため、まちづくり協定やガイドライン等により、パブリックスペースを再設計

